

この投稿は、学会の見解を示すものではなく個人の責任においてなされたものです。
一切の責任は、投稿者本人に帰するものとします。

バージニアからの手紙

第2回：不思議な生態を持つ17年蟬

今回は周期ゼミについてお話してみたい。アメリカではこのようなセミを **Periodical Cicadas** と言う。13年ゼミと17年ゼミの2種類があり、主にアメリカ中西部から東部にかけて生息している。実に不思議なことに、それぞれ13年あるいは17年の周期で、皆揃って行動する。即ち、12年間ないしは16年間は、全く地上に見られず、当該年になると一斉に地上に出てくる。

この2種類の内17年ゼミは、目が赤く、体長3センチの小さなセミである。16年間地上から30センチ程の深さの土中で木か草の根を食し、17年目に幼虫は地上に這い上がり羽化する。2013年の本年はその年に当たり、4月下中から6月初旬までの間、次々と地上に姿を現した。その数は膨大で分からない。発生場所は主にバージニア州であったが、何処にでも現れた訳ではなく、首都ワシントンDC周辺やその近郊にはその姿はなく、ワシントンDCから南、通称中部バージニアといわれる近辺に一番多く現れた。

先ず、17年ゼミの年であると言う兆候が3月末から見られる。林、森、家の庭など、色々な場所の土が盛り上がり、ちょうどモグラが掘り起こしたようになる。そのうちほぼ直径1センチ程の小さな穴が至る所に現れ、あたかも沢山の穴が開いたスイスチーズの様な模様を作り出す。そして明け方、土の中から幼虫のまま出てきて、木や家の壁に這い上がり羽化を開始し、1時間程度で体長3センチ程の目の赤い立派な成虫になる。最も好むのが樫の木で、その幹を一生懸命に這い上がっていくが、決して高い所までは登らず、おおそ地上から1から2メートルの高さの範囲内で留まる。今年はこの行動が6月20日ごろまで続いた。

その後、子孫を残す大仕事が始まる。泣き声は日本の蟬のミン、ミンとは大きく異なり、ワーワーと言う音かヒューヒューという音であるが、決して耳障りでうるさいという気持ちにさせるものではない。この音楽的な鳴き声で雌を誘い卵を産み終わると静かに彼等が消えいく。その時は一抹の寂しさを感じさせられる。



黒点は実際の目ではなく外敵から身を守る為の偽装の目

卵は木の枝に傷をつけ産み付けられる。おおよそ6週間位で卵からかえると幼虫は地上に落ちて地中に潜る。そして次の17年後つまり2030年の再会するまで地上から消えてしまう。卵を産み付けられた枝の先の葉は枯れてしまい、遠方から見るとどの木も花が咲いている様にも見える。このセミは非常に高カロリーの生物であるため、池の魚も亀もはたまた犬までも大好物にしている。

生態の不思議さを実感させるこのセミは、バージニア州の人達によって大事に扱われ見守られてきた。低空飛行をする為、しばしば人にぶつかったり、車のフロントガラスにぶつかったりする。手の平に入れても逃げる訳でもない。従って人々も殺すことの無いよう注意をして行動する。人によりこの時期に庭の芝刈りも中止し刺激を与えないように大事にしている。何故か？ それはこのセミが空中を飛ぶだけではなく、地面を這ったり、草の上を這ったりするからです。

このセミが到来すると人々の話題は一気にセミ一色に集中する。不思議さと謎は何と言っても、何故彼らが17年目になると間違いなく地上に現れるのか、生物学者でさえも首をひねる。生物学者の話では、かつてはこの種のセミがアメリカ中西部から東部まで広範囲に生息していたが、森林を伐採してトウモロコシ畑にした結果として砂漠化したため、今日では生息域は東部の限られた地域のみになってしまった。その東部の生息域も非常に地域が狭まれてきている。生態系に異常をきたしている姿がここでも見られる。

この珍しい17年ゼミはバージニア州にとって17年に一度の大きな社会現象となっており、大人のみならず子供達にも大きな影響を与えている。バージニア州の子供たちは、常日頃、緑の多い自然の中で生活し、鹿や狐などが家々の庭を横切る姿を見たり、種々の鳥の声を聞きながら空を舞うコンドルや **Vulture** と呼ばれるはげ鷲を毎日見ている。そうした自然と共存しながら生活している子供達にとっても、このセミの出現は生物実験さながらの現象で、何やら別世界の生物が現れたような心を躍る瞬間である。小さな子供達は羽化するセミをみてまるで自分が宇宙人に出あったかの様にはしゃぎ回る。無論、新聞も紙上に記事として取上げ、大学も社会人を対象に特別講演会を開催するなど力を入れている。自らもこの地に在住し貴重な経験を得る事が出来たが、それにもまして人々の関心の高さと学ぼうとする真摯な姿勢に感動した。

2013年8月

バージニア州
シャーロットビル在住
渡辺 和子